

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Use of Chinese characters by Japanese children in guided compositions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島村, 直己, SHIMAMURA, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001105

児童の漢字使用

—課題作文の漢字含有率から—

島村直己

要旨: 本研究は、児童の課題作文を材料として、その漢字含有率に関して行った調査の報告である。

〔材料〕千葉県松戸市内の公立小学校3校の2年生、4年生、6年生が、「わたしの学校」「先生」「ともだち」という課題で書いた作文から、各学年各課題60編を抽出して、分析の材料とした。

〔目的〕①作文の漢字含有率は、学年間、課題間でどの程度変動するか。②同一児童が同一課題で二回作文を書いた場合、漢字含有率はどの程度変動するか。③付随的であるが、作文の長さとの漢字含有率の関係、および漢字含有率の男女差について見る。

〔結果〕①学年間、課題間で漢字含有率に違いが認められた。②同一児童が同一課題で作文を書いても、漢字含有率にかなりの変動が認められた。③作文の長さとの漢字含有率の間には、わずかながら負の相関が認められた。また、漢字含有率の大きさに男女差は認められなかった。

キーワード: 児童, 課題作文, 漢字使用, 漢字含有率, 日本語

Use of Chinese Characters by Japanese Children in Guided Compositions

Naomi Shimamura

Abstract: This is a report on an investigation into the occurrence rate of Chinese characters in children's compositions on given themes.

[DATA]

This study is based on 720 compositions written by 2nd, 4th and 6th graders.

[AIMS]

- (1) To learn to what extent the occurrence rate of Chinese characters differs from one grade group to another and from one theme group to another.
- (2) To learn to what extent the occurrence rate of Chinese characters differs in the case of the same child making two compositions on the same theme.
- (3) To study the correlation between the length of a composition and the occurrence rate of Chinese characters in it.
- (4) To study the difference in frequency in Chinese characters between the male and female groups.

[CONCLUSIONS]

- (1) Differences in the occurrence rate of Chinese characters were found to exist between one grade group and another and between one theme group and another.
- (2) A considerable difference in the occurrence rate of Chinese characters was found between two compositions by the same child on the same theme.
- (3) The relationship between the length of a composition and the occurrence rate of Chinese characters contained in it was found to be of slight negative correlation.

Key words: Japanese children, guided composition, use of Chinese characters, occurrence rate of Chinese characters, Japanese

1. はじめに

児童の漢字使用の傾向を見たり、また、児童の漢字使用能力の程度を見たりするために、児童の作文の漢字含有率を求めて、それを分析の指標とすることがある。本稿は、この児童の作文の漢字含有率に関して行った基礎的な調査の報告である。

2. 調査の目的

児童の作文の漢字含有率を調査項目の一つとして取り上げて、報告したものに、例えば、次のような調査報告がある。

- A. 国立国語研究所「小学生の言語能力の発達」(国立国語研究所報告16), 明治図書, 昭和39年
- B. 文化庁「児童・生徒の読み書きの力——当用漢字について——」(国語シリーズ67), 大蔵省印刷局, 昭和47年
- C. 国立国語研究所「児童の表現力と作文」(国立国語研究所報告63), 東京書籍, 昭和53年

このうち、Bの文化庁調査では、全国の小学校、中学校それぞれ12校の児童・生徒が種々雑多な課題で書いた作文を集め、小学校1年生から中学校3年生までのそれぞれの学年について、「100字につき漢字使用数」を求めて、報告している¹⁾。しかし、作文の課題が異なれば、それに使われる単語や漢字は異なる。したがって、その漢字含有率も異なってくるのが当然予想される。そのため、作文の漢字含有率に影響を及ぼす要因の一つと思われる「作文の課題の違い」というものを全く考慮していないという点で、Bの文化庁調査には若干の不満足な点がある。

これに対し、A、Cの国立国語研究所調査では、Aは「わたくしのうち」という課題を、Bは「ともだち」という課題を、それぞれ児童に与えて作文を書かせて、その漢字含有率を調べている²⁾。課題を統制して作文の漢字含有率を測定しているという点で、A、Cの二つの調査とも、上に述べたよう

なBの文化庁調査の難点を免れている。しかし、A、Cの両調査とも作文の課題が異なると、その漢字含有率はどの程度異なるか、ということについて評価することまでは行っていない。

そこで、次のことを目的として、本稿で報告する調査を行った。

①作文の課題が異なると、作文の漢字含有率はどの程度異なるか、ということ調べる。しかも、このことを、ある一つの学年の児童についてだけでなく、なるべく広い範囲の学年の児童について調べる。

②上の①のことは、別々の課題で作文を書いた集団の間の相互比較によって行われる。そして、そのような比較は、それぞれの集団の漢字含有率の平均値を相互に比較することによって行われるのが普通である。その場合、集団を構成する一人一人の児童は、基本的に、表面に出てこない³⁾。そこで、同一の児童が同一の課題で二度書いた作文を分析の材料とすることによって、集団と、その集団の構成要素である一人一人の児童との関係について見る。

3. 調査の概要

(1) 材料

分析の材料として用いた作文は、次の要領で採集した作文資料の部分である⁴⁾。

①調査校

千葉県松戸市立大橋小学校（校長 佐藤孝次）

同 新松戸南小学校（校長 伊藤辰夫）

同 和名ヶ谷小学校（校長 伊藤文夫）

②調査学年

2, 4, 6 学年

③調査課題

- わたしの学校
- 先生

・ともだち

一つの調査校の一つの調査学年で1学級ずつ、上の三つの課題を一つずつ課した。したがって、どの調査学年でも、一つの課題について3学級の児童(約120名)に作文を書かせたことになる。

ただし、課題「ともだち」については、同一の児童に、2, 3週間の間隔をあけて、2回この課題で作文を書かせた。なお、作文は原稿用紙に書かせた。使用した原稿用紙は、市販されているB4判のたて書き400字詰のものである。

本稿で報告する調査では、この作文資料から、一つの課題について、それぞれの調査校のそれぞれの調査学年から男女各10名分の作文を抽出して分析の対象とした。各課題、それぞれの学年について、合計60名分の作文を抽出したことになる。

④調査者

調査学級の担任教師。

⑤調査時間

児童への教示の時間を含めて55分。(1学校時間45分に休み時間10分を合計した時間。)45分経過後、あと10分ぐらいで作文をまとめなさい、という教示を児童に与えて、調査を完了させるようにした。

⑥調査期間

昭和58年2月, 3月。

(2) 漢字含有率の計算方法

まず、作文に使われた記号・文字類を、「記号」「洋文字」「平仮名」「漢字」の五つの種別に分けて、一編一編の作文についてそれらの個数を数えた。その際に、問題となった点については、次のように処理した。

- ①題目、氏名などを除いた本文のみを対象とした。
- ②算用数字はアルファベットと同じく洋文字として扱った。
- ③傍点、振り仮名は無視した。
- ④長音符号「ー」は片仮名として扱った⁵⁾。

- ⑤踊り字「々」は漢字として扱った。
- ⑥「和名ヶ谷」「一ヶ月」の「ヶ」は漢字として扱った。
- ⑦「km」「cm」は洋文字二文字と数えた。
- ⑧「m²」は記号一個として扱った。
- ⑨分ち書きのために生じた空白は無視した。
- ⑩改行のために生じた空白は無視した。

その後、一編一編の作文の漢字含有率を、次の式で求めた⁶⁾。

$$\text{漢字含有率} = \frac{\text{漢字数}}{\text{文字数}} \times 100$$

(文字数 = 洋文字数 + 片仮名数 + 平仮名数 + 漢字数)

4. 調査の結果

(1) 学年間、課題間での違い

ここでは、

- わたしの学校 (以下、「学校」と略記する。)
- 先生
- ともだち (以下、「友達」と記す。)

という三つの課題で書かれた作文を対象とする。(「友達」については、同一の児童がこの課題で2回作文を書いているが、ここでは、1回目に書かれた作文のみを対象とする。等しい条件で書かれた作文を対象としなければならないためである。)

一編一編の作文について、3の調査の概要で述べた計算式によって漢字含有率を求めた。表1は、それぞれの課題について、学年ごとに、5%きざみの度数分布、および平均値、SD、最大値、最小値をまとめたものである。また、図1は、それぞれの課題について、学年ごとに、平均値をグラフ化したものである⁷⁾。表1、図1から、以下のことが言えよう。

- ①どの課題も、上の学年の場合ほど、漢字含有率の平均値は大きい。それぞれの課題について、学年間での漢字含有率の平均値の差を検定すると、次のようになる⁸⁾。(t検定による。両側検定を行い、1%水準で有

表1 漢字含有率の度数分布と統計量

	学 校			先 生			友 達		
	2年生	4年生	6年生	2年生	4年生	6年生	2年生	4年生	6年生
0.0—5.0%	5	1	1	8	0	0	18	2	0
5.1—10.0	14	4	0	21	3	0	28	9	1
10.1—15.0	14	5	3	21	14	4	13	21	3
15.1—20.0	18	8	9	6	20	3	1	18	18
20.1—25.0	6	17	14	4	13	29	0	7	29
25.1—30.0	2	14	19	0	7	17	0	3	8
30.1—35.0	1	7	6	0	2	3	0	0	1
35.1—40.0	0	4	6	0	1	3	0	0	0
40.1—45.0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
45.1—50.0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
50.1—55.0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
計	60	60	60	60	60	60	60	60	60
平均値	14.0	22.9	25.8	10.7	18.7	24.8	6.9	14.6	21.0
S D	6.3	8.1	7.6	4.9	6.0	6.2	3.3	5.6	4.4
最大値	30.6	39.6	45.6	22.8	35.4	50.4	17.7	29.1	32.8
最小値	2.8	3.3	4.0	0.0	8.5	12.9	1.8	4.1	8.8

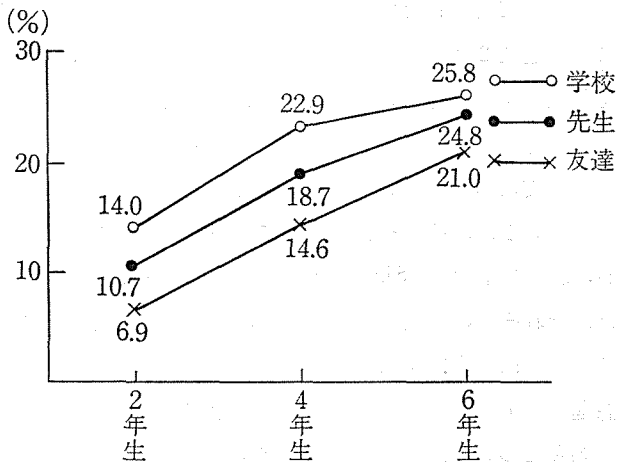


図1 漢字含有率の平均値

有意差が認められたところには] を, 5%水準で有意差が認められたところには] を, それぞれ記した。)

[学校]	[先生]	[友達]
2年生: 14.0%	2年生: 10.7%	2年生: 6.9%
4年生: 22.9%	4年生: 18.7%	4年生: 14.6%
6年生: 25.8%	6年生: 24.8%	6年生: 21.0%

どの課題も, 1%水準, または5%水準で, 学年間に有意差が認められた。2学年ずつの間隔があるが, 課題の違いに関係なく, 学年が上の児童の書いた作文ほど, 作文の漢字含有率が大きい傾向がある, と言ってよいであろう。

②課題間について見ると, 同じ学年でも, 課題によって漢字含有率の大きさに違いが見られる。それぞれの学年について, 漢字含有率の平均値のもっとも大きい課題ともっとも小さい課題との差を見ると,

2年生——7.1%

4年生——8.3%

6年生——4.8%

というように, かなりの違いがある。それぞれの学年について, 課題間での漢字含有率の平均値の差を検定すると, 次のようになる。(t検定による。両側検定を行い, 1%水準で有意差が認められたところには] を, 5%水準で有意差が認められたところには] を, それぞれ記した。)

[2年生]	[4年生]	[6年生]
学校: 14.0%	学校: 22.9%	学校: 25.8%
先生: 10.7%	先生: 18.7%	先生: 24.8%
友達: 6.9%	友達: 14.6%	友達: 21.0%

6年生の「学校」と「先生」の間を除いて, どの学年でも, 課題間に1%水準, または5%水準で有意差が認められた。ひとまず, どの学年でも, 作文の課題が異なれば, 作文の漢字含有率は異なる傾向がある, と言うことができよう。

③どの学年でも、「学校」「先生」「友達」の順に漢字含有率の平均値は小さい。しかし、2年生、4年生では、これらの課題相互の差はほとんど同じであるが、6年生では、「学校」と「先生」の差がごくわずかとなる。この理由については、分からない⁹⁾。

(2) 集団内、個人内での違い

「友達」という課題については、同一の児童がこの課題で2回作文を書いている。そこで、この課題で書かれた作文を材料とすることによって、同一の集団内、および同一の個人内での漢字含有率の違い（変動）について見ることにする。

表2は、それぞれの学年について、1回目に書かれた作文の場合と2回目に書かれた作文の場合とに分けて、5%きざみの度数分布、および平均値、SD、最大値、最小値をまとめたものである。図2は、平均値のみをグラフに表したものである。どの学年においても、漢字含有率の平均値は、1回目の場合よりも2回目の場合のほうが大きい。そこで、1回目の場合と2回目の場合との漢字含有率の平均値の差を評価するために、対応のある場合の平均値の差の検定によってt値を計算すると、それぞれ次のように、学年が上の場合ほどt値が大きい傾向がある。(両側検定を行った場合での、t値のパーセント点を()の中に記す。なお、いずれの場合も、df=59である。)

2年生——1.14 (0.2<P<0.3)

4年生——2.22 (0.02<P<0.05)

6年生——2.34 (0.01<P<0.02)

2年生では有意差が認められないが、1回目の場合よりも2回目の場合のほうが漢字含有率が高く、また、この傾向は、学年が上の場合ほどはっきりしている、と行うことができよう。

しかし、このような集団の平均値を用いた分析では、基本的に、集団を構成する個々の児童というものは表面に出てこない¹⁰⁾。そこで、個々の児童について、1回目の場合と2回目の場合とについて比較する。

1回目に書いた作文の漢字含有率と2回目に書いた作文の漢字含有率との相関係数は、それぞれの学年の場合について計算すると、次のようになる。

表2 「友達」の漢字含有率の度数分布と統計量

	2 年 生		4 年 生		6 年 生	
	1 回 目	2 回 目	1 回 目	2 回 目	1 回 目	2 回 目
0.0— 5.0%	18	21	2	2	0	0
5.1—10.0	28	23	9	6	1	0
10.1—15.0	13	12	21	24	3	4
15.1—20.0	1	2	18	13	18	19
20.1—25.0	0	1	7	10	29	18
25.1—30.0	0	1	3	4	8	13
30.1—35.0	0	0	0	1	1	6
計	60	60	60	60	60	60
平 均 値	6.9	7.6	14.6	16.0	21.0	22.5
S D	3.3	5.3	5.6	6.0	4.4	5.3
最 大 値	17.7	26.9	29.1	30.3	32.8	34.3
最 小 値	1.8	0.0	4.1	2.5	8.8	11.8

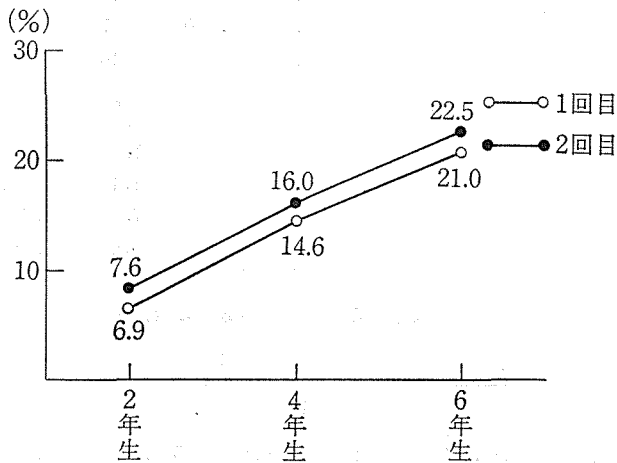


図2 「友達」の漢字含有率の平均値

同一児童が同一課題で書いたことを考えると、それほど大きな値とは思われない。

2年生——0.476

4年生——0.652

6年生——0.497

2回目に書いた作文の漢字含有率は、1回目に書いた作文の漢字含有率の何倍になっているかを計算して、表3にその度数分布、および平均値、SD、最大値、最小値をまとめた¹⁾。この表から個々の児童について見ると、1回目の場合よりも2回目の場合のほうが漢字含有率が大きくなった者、反対に小さくなった者、そしてほとんど変わらない者など、さまざまである。しかし、学年が上の場合ほど、SDからも、最大値と最小値からも、そのばらつきが小さくなっている。下の学年の児童

表3 何倍になったか

	2年生	4年生	6年生
0.000—0.500	12	2	0
0.501—1.000	16	21	20
1.001—1.500	15	29	37
1.501—2.000	7	5	3
2.001 以上	10	3	0
計	60	60	60
平均値	1.255	1.164	1.093
S D	1.136	0.435	0.248
最大値	7.760	2.673	2.000
最小値	0.000	0.481	0.648

ほど、作文の漢字含有率の個人内の違いが大きい、とすることができよう。

本調査を行う前の予想は、1回目の場合と2回目の場合とでの個人内の違いは大きい、集団全体での違いはほとんどないであろう、というものであった。しかし、この予想は外れた。なぜ、2回目の場合のほうが漢字含有率の平均

表4 「友達」の長さ(文字数)の統計量

	2年生		4年生		6年生	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
平均値	410.1	377.8	586.8	534.7	636.2	504.9
S D	174.6	122.2	276.8	241.5	219.4	196.0
最大値	894.0	716.0	1639.0	1145.0	1166.0	1329.0
最小値	83.0	197.0	181.0	217.0	289.0	129.0

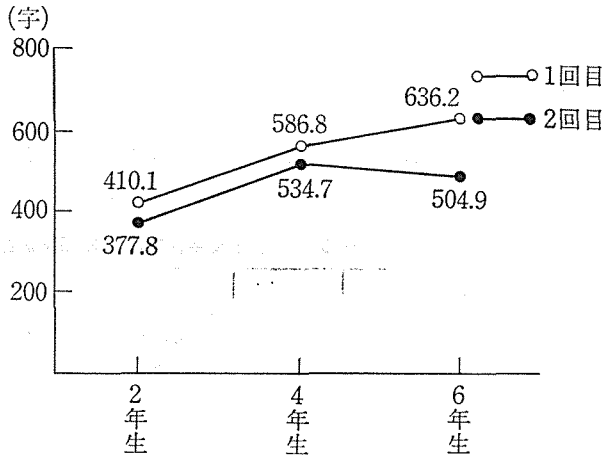


図3 「友達」の長さ（文字数）の平均値

値が大きいのであろうか。表4は、一編一編の作文の長さ（文字数）を計算して、それぞれの学年について、1回目の場合と2回目の場合とに分けて、平均値、SD、最大値、最小値をまとめたものである。また、図3に平均値をグラフに表した。どの学年でも、1回目の場合よりも2回目の場合のほうが、長さの平均値は小さい。試みに、対応のある場合の平均値の差の検定によってt値を計算すると、次のようになる。（両側検定を行った場合での、t値のパーセント点を（ ）の中に記す。なお、いずれの場合も、df=59である。）

2年生——1.72 (0.05<P<0.1)

4年生——1.65 (0.1<P<0.2)

6年生——4.95 (P<0.01)

このことから、1回目に書いた場合よりも2回目に書いた場合のほうが漢字含有率が高くなる理由として、児童は、2回目に書くときはだらだらと書かずに叙述をまとめようとし、しかも文章表記に気を配るようになる、ということが推測される。

(3) 補足的な分析

この調査で直接の目的とはしなかったことであるが、二つの補足的な分析

を行う。

1) 漢字含有率と長さ

長い作文が良い作文であるとは必ずしも言えない。しかし、書きことばの習得過程にある児童にとって、長い作文を書くことは、大変な努力を必要とすることである。そこで、漢字含有率と長さとの関係について見ることにした。

表5は、それぞれの課

表5 長さとは漢字含有率との相関係数

題について、学年ごとに、漢字含有率と長さ（文字数）との相関係数を計算して、記したものであ

	学 校	先 生	友達1	友達2
2年生	-0.217	-0.038	-0.152	-0.114
4年生	-0.025	-0.001	-0.089	-0.050
6年生	-0.207	-0.270	-0.047	-0.219

る¹²⁾。(表中、「友達1」「友達2」は、それぞれ、「友達」の1回目に書いた作文、「友達」の2回目に書いた作文、のことである。) いずれも、絶対値はそれほど大きくはないが、負の値である。長い作文だからといって、必ずしもその漢字含有率は大きくない。むしろ、長い作文ほどその漢字含有率は小さいという関係がわずかながらある、とすることができよう。しかも、漢字含有率と長さ（文字数）とをクロス集計した表6に見られるように、漢字含有率の飛び抜けて大きい作文は、おおむね短い作文のようである。

表6 長さ（文字数）と漢字含有率のクロス集計（全体）

漢字含有率 長 さ	0.0	5.1	10.1	15.1	20.1	25.1	30.1	35.1	40.1	45.1	50.1	計
	5.0	10.0	15.0	20.0	25.0	30.0	35.0	40.0	45.0	50.0	55.0	
0—200	4	11	13	10	10	4	1	0	0	0	1	54
201—400	31	51	58	39	39	29	16	7	1	1	0	272
401—600	19	34	33	50	59	37	9	5	0	0	0	246
601—800	2	10	20	20	21	12	1	2	0	0	0	88
801—1000	2	1	6	10	14	4	0	0	0	0	0	37
1001—1200	0	1	7	4	5	2	0	0	0	0	0	19
1201—1400	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	3
1401—1600	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1601—1800	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	58	109	138	135	148	88	27	14	1	1	1	720

2) 男女差

前掲の国立国語研究所「小学生の言語能力の発達」では、男子よりも女子のほうが長い作文を書くことが報告されている¹³⁾。しかし、漢字含有率について男女差が認められるかどうか、ということは扱われていない。そこで、漢字含有率の男女差を見ることにした。

表7は、それぞれの課題について、学年ごとに、男子の場合と女子の場合に分けて、漢字含有率の平均値とSDを記したものである。この表に見られる通り、どの場合においても、男子と女子との差はわずかである。(t検定を行っても、両側検定で有意差が認められたのは、「友達」の2回目に書かれた6年生の作文の場合のみである。) また、ある場合には、男子よりも女子のほうが漢字含有率が大きく、そして別の場合にはその反対であるというように、男女差の方向が一定していない。作文の漢字含有率については、その大きさに男子と女子とで違いは見出せない、と言うことができよう。

表7 漢字含有率の男女差

			学 校	先 生	友達1	友達2
2 年 生	男 子	平均値	13.6	10.8	6.8	7.2
		S D	6.8	5.4	3.8	6.3
	女 子	平均値	14.4	10.6	7.0	8.0
		S D	5.8	4.4	2.8	4.1
4 年 生	男 子	平均値	23.1	18.6	14.8	16.6
		S D	8.9	6.8	7.1	7.2
	女 子	平均値	22.6	18.9	14.4	15.3
		S D	7.4	5.3	3.7	4.5
6 年 生	男 子	平均値	26.4	24.1	21.2	24.7
		S D	8.2	7.5	4.2	5.4
	女 子	平均値	25.1	25.4	20.8	20.3
		S D	6.9	4.6	4.6	4.3

5. おわりに

漢字含有率は、児童の作文に使われるとき、児童の漢字使用の傾向や、ま

た漢字使用能力の程度を見るための「ものさし」として使われる。しかし、本稿で明らかにしたように、作文の課題の違いというものに気をつけて使わなければ、その「ものさし」としての役目は十分に果たせないようである。また、4の調査の結果の(2)で見たように、同一の児童が同一の課題で作文を書いても、漢字含有率の変動は意外と大きかった。漢字含有率は、ある一人の児童のある一編の作文に使って、その児童の漢字使用について何か言及する、というような使い方はしにくいようである。多人数の児童のひとかたまりの作文に使い、その集団全体について何か言及する、または、ある一人の児童についてでも、何編かの作文に使い、作文間の漢字含有率の違いを十分に吟味した上で、その児童について何か言及する、というような使い方をするほうが良いようである。

[注]

1) 「種々雑多な課題で書いた作文」と書いたが、これは筆者の推測である。報告書には、「昭和39年の7月じゅうに各校で書かせた作文」(文化庁、前掲書、258ページ)とあるだけで、どのような範囲の課題で書かせた作文なのか、はっきりと説明されていない。しかし、本文中の記述から、種々雑多な課題の作文と推測される。

また、学年ごとに、「100字につき漢字使用数」を計算している。しかし、資料とした作文全体を込みにして「100字につき漢字使用数」を求めたものなのか、それとも、一編一編の作文の「100字につき漢字使用数」を求めて、その平均値を計算したものなのかということも、はっきりと説明されていない。

2) 「小学生の言語能力の発達」では、「ともだち」「わたくしのうち」「先生」という三つの課題を与えて児童に作文を書かせている。しかし、同報告書に漢字含有率が報告されているのは、「わたくしのうち」という課題についてだけである。ただし、「児童の表現力と作文」では、あらためて、「小学生の言語能力の発達」調査の「ともだち」という課題作文の漢字含有率を求めて、比較対照している。これについては、注6)を参照のこと。

3) 注10)を参照。

4) この作文資料は、言語教育研究部第一研究室 茂呂雄二と共同で採集したものである。

5) 長音符号は、文字と同じように語を表す成分であり、また、普通には片仮名としか共起しない。そのため、片仮名として扱った。(平仮名の後に長音符号を書

いた例もわずかであるがあった。だが、その場合にも、長音符号は片仮名として扱った。)

- 6) 児童の作文を材料としたものに限らず、漢字含有率を扱った研究で、漢字含有率の計算方法を明示的に述べたものは少ない。週刊誌を対象にしてであるが、計算式の違いによって漢字含有率に違いが出ることを示したものに、野村雅昭「週刊誌の漢字含有率」(計量国語学12-5, 1980年)がある。

本調査では、次の二つの理由から、本文に述べるような、記号類を無視した計算式を採用した。

①児童の作文には空白が多く、それらの空白の中には、句読点などと等価な働きをしていると思われるものもかなりあった。しかし、空白を無視しなければ、記号・文字類を数えるという作業を進めることができなかった。

②本調査では、漢字含有率を、「思想(表現内容)を最終的に書きこばへと変換する際の漢字を選択する度合」と考えた。そのため、句読点や括弧などの記号類は、思想を表す成分ではないと考えられるので、無視する必要があった。

もっとも、

$$\text{漢字含有率} = \frac{\text{漢字数}}{\text{文字数} + \text{記号数}} \times 100$$

という式によっても求めてみたが、本文で述べた式によって得られた漢字含有率と、この式によって得られた漢字含有率との相関係数は、学年、課題ごとに計算すると、0.991~0.999であって、きわめて高い。

- 7) 国立国語研究所「児童の表現力と作文」では、課題作文「ともだち」について調査して、「小学生の言語能力の発達」調査で得られた作文資料との経年比較を行っている。前者を〔新〕とし、後者を〔旧〕として、以下引用する。(両調査とも、本稿と同じ計算式によって漢字含有率を求めている。)

①調査対象

〔旧〕東京都新宿区、栃木県小山市の小学校6年生84名

〔新〕東京都杉並区、新潟県新潟市、奈良県奈良市の小学校6年生99名

②調査時期

〔旧〕昭和33年1月

〔新〕昭和48年5月

③平均漢字含有率(SD)

〔旧〕11.83% (6.91%)

〔新〕14.32% (5.43%)

- 8) 本稿で材料とした作文の母集団は、それぞれの課題のそれぞれの学年について、標本の約2倍の量でしかない。その点で、統計的な検定を行っても、実際に

はあまり意味がない。そこで本稿では、標本間の値の違いを評価するための目安としてのみ、統計的な検定を使うことにする。

なお、t 検定を行う際、等分散の仮説を検定し、棄却された場合、Cochran-Cox の法によって検定した。以下についても、同様である。岩原信九郎「教育と心理のための推計学」(日本文化科学社、昭和40年(新訂版)184ページを参照。なお、本稿では、5%水準、ないしは1%水準で有意差が認められたとき、省略して、単に「有意差が認められた」と言うことがある。

- 9) 6年生で、「学校」と「先生」の差がほとんどなくなっているが、これが偶然によることなのか、それとも何か理由があることなのか、中学生について調査していないこともあって分からない。今後の検討を必要としよう。

普通には、義務教育段階ぐらいでは、漢字含有率は年齢とともに増大していく傾向にある。もっとも、年齢とともに増大する傾向があるとはいっても、いつかその増大が止まるときがやってくる。この点で、漢字含有率の、いわば飽和状態とでもいうべきことについて述べた海保博之の次のことばは参考になる。

「漢字使用について、ほぼ定常状態にあると思われる大学生についての2つの作文資料(P1, P4)中の含有率は、いずれも30%を少し越える程度である。3種類の規範的資料の含有率は、作品の32.6%をはさんで、新聞の41.4%から、新書の24.5%とかなり推定に幅があるが、平均すると33%となり、作文中のそれとほぼ一致した水準になる。かくして漢字含有率30%近傍が一つの心理的規準値を形成している」と推定される。

文中に混在する漢字は多すぎても、少なすぎても文の情報伝達機能の観点からは好ましくない。30%近傍の漢字含有率が、最適表記の大枠の目安を与え、この枠のもとで、さらに何を漢字で表記するか、しないか……(中略)……の微妙かつ瞬時的な選択が行われていると思われる。」(海保博之『漢字の含有率』日本心理学会第44回大会発表論文集、昭和55年)

- 10) t 検定による平均値の差の検定の場合、基本的に、個人は平均値からの偏差として考慮されるにすぎない。(対応のある場合には、相関係数がそれに付け加えられて考慮されるだけである。) t 値の計算式を参照のこと。
- 11) 2年生の最大値7.760は特異な値である。この児童の2回目に書いた作文は、漢字数が多くなり、1回目の作文の漢字含有率が小さいこともあって、このような特異な値となった。この児童を除くと、2年生の最大値は、3.528である。
- 12) 相関係数の無相関検定を行って、有意差の認められたところは、「先生」の6年生の場合のみである。
- 13) 国立国語研究所「小学生の言語能力の発達」384~385ページを参照のこと。このことは、本調査でも認められた。表8を参照。ただし、男子と女子との間で平均値の差を検定すると、有意差の認められたところは、次のところである。(t 検

表 8 長さ（文字数）の男女差

			学 校	先 生	友達1	友達2
2 年 生	男 子	平均値 S D	253.2 141.8	314.6 192.8	327.6 154.0	333.7 91.6
	女 子	平均値 S D	273.8 136.2	374.3 194.7	492.6 155.7	421.9 134.0
4 年 生	男 子	平均値 S D	355.0 90.4	398.8 157.4	553.0 299.6	472.0 219.2
	女 子	平均値 S D	437.9 111.9	517.8 234.6	620.6 252.4	597.4 250.0
6 年 生	男 子	平均値 S D	358.9 157.4	500.9 238.2	596.5 194.1	434.1 143.0
	女 子	平均値 S D	531.0 188.3	568.9 217.7	675.9 238.7	575.7 217.6

定による。両側検定を行い、1%水準で有意差が認められたところには**を、5%水準で有意差の認められたところには*を記した。そして、有意差の認められないところには-を記した。）

	[学校]	[先生]	[友達1]	[友達2]
2年生	—	—	**	**
4年生	**	*	—	*
6年生	**	—	—	**

なお、同上書によると、このことは、新潟県立教育研究所が行った調査でも認められているとのことである。「この現象・傾向は、われわれの調査結果ばかりでなく、新潟県の調査でも同様に認められており、研究担当者谷沢氏は、『この現象は1957年および1958年に読解力検査を作成した時に、検査結果の男女差を分析した場合と類似するところがあるようである。読解力検査問題の領域の中では、男子は構造的に理解することが必要な、大意把握や推理方面の問題にすぐれていたのに対して、女子は、事実の読みとりや、細部の理解に優位を示していた。』とし、このような両性の差は、『男女の思考特性、成熟度、理解構造の質のちがいが、あるいは、むしろ生活態度、生活環境・生活慣習のちがいにもとづくものか』と作文に関連させて問題を提示している。」(同上書、385ページ)

[付記]

本稿は、昭和60年7月に行われた、次の二つの学会で発表したものをまとめ直したものである。

筑波大学人文科教育学会

第18回全国大学国語教育学会

本調査には多くの人々の協力を得た。材料として使った作文資料の採集には、調査校の方々、とりわけ新松戸南小学校の鮎川 清教諭にお世話になった。また、作文の文字数を数えるという厄介な仕事は、古宮不二子、島村絹代、田中志津子、飛永洋子、中村弘子、渡辺陽子（以上アルバイト）、川又瑠璃子の諸氏にお願いした。このことを記して感謝する。